

一九七七年以前出土の木簡（一八）

長野・塩田城跡

しおだじょう



(坂城)

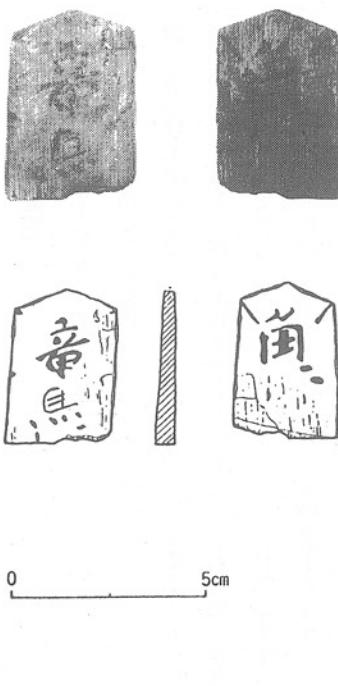
- 1 所在地 長野県上田市大字東前山
- 2 調査期間 一九七五年（昭50）七月～一九七七年九月
- 3 発掘機関 上田市教育委員会
- 4 調査担当者 黒坂周平・川上 元
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 一六世紀
前半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

塩田城跡は、上田市の南に展開する塩田平のほぼ中央にそびえる独鉱山の一支脈である弘法山北山麓に所存し、塩田平を一望できる

位置にある。山麓の斜面には二〇数段に及ぶ大小の段郭（平坦面）が構築され、北眼下の東前山集落一帯を城下町とした広大な城館跡が想定されて、一九七〇年に県史跡に指定された。

歴史的には、建治三年（一二七七）、鎌倉幕府の重臣であった北条義政が信濃に入り、その子国時・孫俊時・孫義時・孫義貞の三代約六〇年間にわたつて、この地に居を構え、塩田平の政治・文化の中心となつた場所として知られる（塩田北条氏の居館推定地は、城跡北側に位置する東前山集落内の「竹ノ内」地籍が有力である）。しかし鎌倉幕府滅亡時に、塩田北条氏は一族を率いて鎌倉に馳せ参じ、幕府と運命をともにしたため、ここは東信濃に勢力のあつた村上氏の支配下となり、その後福澤氏が長年統治した。また、天文二二年（一五五三）には甲斐の武田氏の侵攻によって落城し、信玄がここを信濃経略の拠点とした時期もある。

塩田城跡周辺で、特に薬用人參栽培が盛んとなり、深耕による遺跡の破壊が予想される事態となつたため、上田市教育委員会では、国・県の補助を得て一九七五年度から一九七七年度にわたつて発掘調査を実施した。それ以前にも一九六七年から数度にわたる調査が



行なわれ、中腹の石積みで囲む「虎の口跡」や内堀地籍にある「空堀跡」などの遺構が部分的に確認されていた。なお、一九七五年度からの調査地点は、下方の東前山集落から数えて一四段目（途中の空堀からは四段目）にあたる段郭の平坦面である。

三カ年にわたって実施した調査では、礎石建物二棟・溝・敷石遺構・土坑などの中世遺構が検出され、あわせて皿・内耳鍋などの土師質土器、珠洲系土器の甕、常滑系大甕・瀬戸系天目茶碗などの陶器類、さらに青磁・白磁・青花などの舶載磁器類、銅錢・笄・小柄・刀子・銅鎌・鍔・鉄釘などの金属製品、硯・砥石・石臼などの石製品、また塗物・曲物・将棋の駒・人形・箸状木製品・建築部材などの木製品類など多くの遺物も確認された。

出土遺物のうち、とくに大陸から渡來した磁器類や常滑系・瀬戸系陶器類を、一六世紀前半頃の資料と推定したため、当初予測した

鎌倉期より新しい時期にかかる遺構であるとの結論に達した。しかし、検出された礎石建物二棟や他の遺構の性格は明らかにできなかつた。将棋の駒は、西側の五間×五間（九m×九・九m）の礎石建物中央南側の礎石外側から出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「角行」

・「龍馬」

41×28×5 061

材質はヒノキ材とみられる。駒の表面に「角行」の墨書があるが、「行」の部分の腐食がはげしい。また、駒の進む方向を示すとみられる印も肩部に墨書きされている。

裏面には「龍馬」の墨書きがある。このうち「馬」の文字も腐食により明瞭でない。ただ一点のみの将棋の駒であるが、類例は福井県一乗谷朝倉氏遺跡の出土遺物などにみられる。

9 関係文献

上田市教育委員会『塙田城跡 第一次～第三次発掘調査概報』
(一九七六年～一九七八年)

(川上 元)